

僕は後悔していない

今まで、もうろうどしていた頭が、竹やぶの日陰にいるうちに、少しずつ、はっきりして来た。

僕の足は、ゆっくりと、一歩一歩、門の前へ向かった。そして、そのまま、門をくぐり、家の戸口に近づいた。静かだ。

彼女はいないのだろうか。

最後の最後まで来た。後は声をかけて、対応を求めるだけだ。

もう、とっくに昼を鳴らすサイレンの音はなった。

今朝は朝四時から、起きている。朝めしも、気がきで、食べていない。

しかし、腹はすいていない。体全体が、そんな状態ではないようだ。

なかなか、声が出ない、と言って、このまま帰れない。会うんだ。

戸口の壁にもたれて、庭の木を、今、くぐって来た門を見ている。



585